

キルトの効用

加藤文子

仕事の合間、父の残したハンカチーフを数枚重ねて糸の色を変えながら刺し子のように縫っている。

ただひたすら正方形の面に針を刺す。手を止めるのも、つづきをするのも容易にできる。しかもハンカチーフは場所もとらない。単純で気楽なのが良い。

昨年から自宅で週末三日間だけのギャラリーを開設した。その際、手伝いに来てくれるめい姪が来客のいない時に退屈しないでやれるのでは……と、ギャラリストのKさんがご提案下さったのがはじめるきっかけだった。

姪はそれほど興味を示さなかったが、私の方がおもしろくなってしまったのだった。

針仕事もライフワークにしているKさんによると、これをラリーキルトと言うのだそう。インドやパキスタン、バンングラデシュなど、中央アジアで長いあいだ受け継がれてきたハンドス



テッチ。古くなったサリィや端切れなどを組み合わせさせてリメイクする。色彩も構成も自由で独創性に富んでいる。ステッチされたパーツをさらに繋<sup>つな</sup>げていけば、ベッドカバーにだってなる。私のしているのは、縫い目も不揃いで未熟でささやかなもの。ラリーキルトの仲間に入れてもらえるのかどうか疑問もあるが、引き出しの中で長いこと眠っていたハンカチーフに糸が通ってあたらしい存在となって登場するのはうれしい。

刺し子をすることで布と布のあいだに空気が含まれて、適度な軽やかさもありませんが、ちょうど良い具合にまわりついて、物を覆った時にずれ落ちることがない。

はじめて仕上げたハンカチーフのキルトは、就寝時までのあいだの空<sup>から</sup>の湯たんぽの容器の上にかけている。味気ないプラスチック製の容器をキルトで覆うだけで室内の風景も変わる。窓から光が射し込むと、糸の畝<sup>うね</sup>が虹のように浮き出てくる。

重ねた布にひと畝、またひと畝刺し込んでフィールドをうめていく。

たとえばこんなふう……。

赤い糸を数列ステッチしたあとは、赤茶色の糸に移行。縫っているうちに、次はグリーンにしようと思いつく。

キレイな色の流れにするには、赤茶色のパーツを充実させる必要がある。なのにひとたび思いつくと、赤茶色を飛び越えて早くグリーンの畝を見たくなくなって気が急いでくる。

おかげで指に針を刺してしまったり、糸が絡んでダメになったり、ラインが乱れたり脱線する。

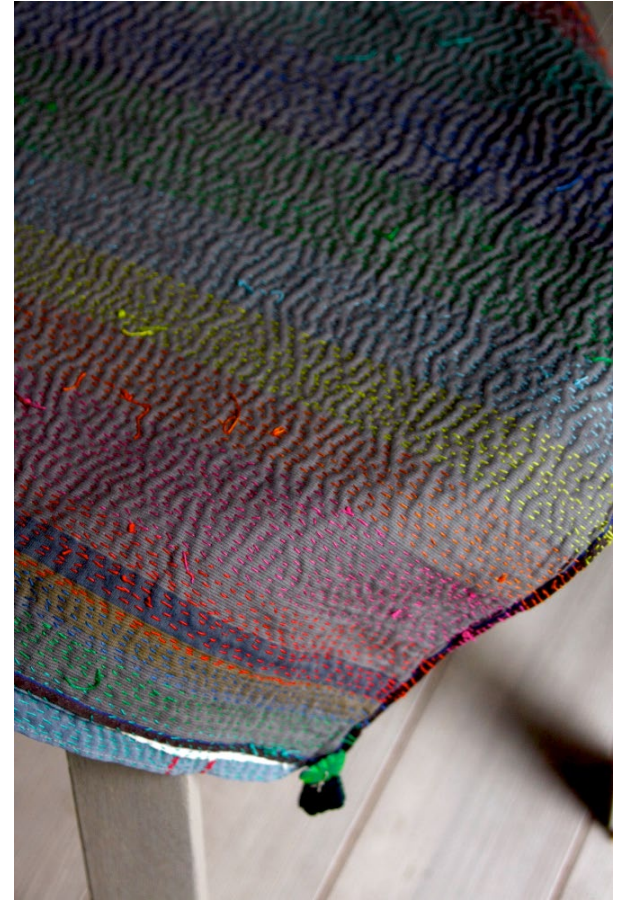
Kさんはキルトをしている時は、ある種瞑想に近い感じがするとおっしゃっていたが、今のところそんな静けさは私にはない。

ゆつくり、ゆつたりとネ……、もうひとりの自分に<sup>たしな</sup>窘められるのだが、逸<sup>はや</sup>る気持ちが抑えられない。

全面にステッチが埋まるまでのあいだ、ハンカチーフそのものをじいっつと見ることになる。今刺しているのは、ブルーグレーの細かなストライプのウンガ口製。よく見ると目を射るようなウルトラマリーンの極細のラインが四隅を縁取っている。さりげないこのラインが利いている。

もう片面に使用したハンカチーフは、アラビア風のプリント地にチロリアンテープの刺繍が施されたユニークな仕上がり。アラベスクとチロリアン、二つの個性をうまく取り入れて上品にまとめている。ハンカチーフの世界もおもしろいと感心している。

ハンカチーフも端切れも、使いきれないほどたくさんある。しばし途切れることはあっても、この先も続けているのだと思う。



イスにかけたラリーキルト

撮影：加藤文子